

ダンス教材の位置づけに関する一考察

著者	布上 恭子
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	8
ページ	67-79
発行年	1975
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002023/

ダンス教材の位置づけに関する一考察

A Consideration on the Position of Dancing Material in Physical Education

布 上 恭 子

Kyoko Nunogami

I は じ め に

ダンスが学校体育の中にとり入れられ久しいが、実際にダンス指導がほとんど成されていない現状にある。また、体操やスポーツ教材は、体育の目標にてらしてその技術向上、体力向上、人間形成についての多くの論議をみるが、ダンスについては深く検討されたり体育教材の位置づけについてくわしく述べられていない。本学入学時の学生にダンス経験の有無について調査した結果でも、第一期生で0であったのが、10年後の本年入学生で1割弱の経験者と増してはいるが、あまりの不徹底さにおどろく。フォークダンスについてはかなり普及しているようであるが、札幌市の小学校でもそのフォークダンスでさえ実施していないところがある現状である。そこで教育における今日的体育科のあり方、ダンス教材の価値を明確にし、ダンス教材が実施されない原因を追求してダンス理念を考えなおし、学校ダンスの発展のために指導の方法を具体化していくべくその資料としたいと考えた。

II 論 議

1. 体育のとらえ方

わが国の学校体育は、小学校より高校まで指導要領を基準として行われ、小学校より大学まで体育は必修とされている。指導要領では、教科の目標、学年ごとの具体的目標や学習内容などが具体的に示されている。この指導要領については、基準となるものとされているが拘束性の強いものであるため、次の改訂まではこれ以上発展したものになりえない。教育の基準となっている学習指導要領は、「学校においては、法令およびこの章以下に示すところに従い、地域や学校の実態および生徒の心身の発達段階と特性を十分に考慮して適切な教育課程を編成するもの」とされているが、指導要領にある学習内容を地域の実態や発達段階にあわせて「適切な教育課程を編成する」ことはむずかしい問題である。教育の画一性、多様性、創造性、自由性かという問題については論議の多いところであるが、いずれにしても国の基準としての指導要領を正しく理解した上に立って、地域や学校の実態および生徒の心身の発達段階と特性を生かし、更に児童・生徒に目標と内容を理解せしめて進めることが理想であろう。体育科の目標は、現時点では明確であるようでも、社会の要請による発展的なものであり種々の角度より論じられうるものである。しかし、

あくまでも体育科によってのみその目標が達成されるものが中核となり、教育の一般目標の達成をめざす一教科であることは論ずるまでもないことである。「健康・安全で幸福な生活のために必要な習慣を養い、心身の調和的発達を図る」という教育目標の一つは体育科以外の教科では達しえないものである。従って体育科の主なねらいは、健康な身体の育成と体力向上ということに他ならない。

教材としての体操・スポーツ・ダンスを単に学習することにより、健康や体力がたかまるか否かについては現行の指導体制の中で反省されるべき点は多い。学習内容を運動的教材と考えると技能を高めることが中心になりがちであるが、体育科で学ぶものは運動技能のみではなく、体育に関する知識や公正・責任・協力などの態度の養成が考えられている。また佐々木氏が「かりに身体活動だけに着目する場合、かならずしも直接的人間関係の場を必要としないこともある。例えば自分ひとりで体操をしたり、個人種目について練習をする時はあくまでも個人であるが、体育科教育は単に運動をすることにつきるのはではない。そこには教育するものから教育されるものへのはたらきかけがなければならない。教育者・被教育者それに教材の三つのモーメントを欠くわけにいかない。したがって体育科教育はその成立の当初において人間関係を基調としているということができる。」と述べているが如く、体育においては個性と能力の違った人同志が共通のルールをもって共同の場で同一の学習を行なうことが多く、そこに生ずる人間関係のあり方については社会的な性格をも含んだものである。ただし社会性を考慮するに際しては、佐々木氏が述べるように体育的現実即ち人間関係のあり方の上でのみ社会性がとりあげられねばならないということであろう。なぜならば、社会性については体育科のみにより育成されるものではないからである。「運動やゲームを通じて公正な態度を育て、進んで約束やきまりを守り、互に協力して自己の責任を果すなどの社会生活に必要な態度を養う。」ことは体育科教育の一つの目標であり可能な事実である。体育科の主たる教材は運動によるものが多く、体育の目標を達成するためには運動教材をどのように選択するかが重要な問題である。

体操のみで始まったわが国の体育教材は遊戯や競技教材が加わり、現行では体操・スポーツ・ダンスという運動文化を教材とし一段と豊富になった。そして現在では、体操・スポーツ・ダンスを行なうことが体育であるという考え方が強くなっているようにうかがえる。猪飼氏らが「運動教材は体育の諸目標を達成するための素材・手段であり、運動文化の類型ということのみにこだわらず体育の目標と生徒・児童の発育発達に応じて学習内容を編成するということが必要である。運動教材はその一面でしかないものであり、さらに人の身体運動ということの基本的理解のうえに運動教材の編成が考えられるべきであろう。体育が単に運動技術の学習ばかりでなく、体力向上ということの一つの目標とする以上、またそのために運動処方ということがいわれている以上単に運動の型にばかりとらわれず、それぞれに即しての質と量の問題が考えられるべきなのである。」と述べているように、運動はあくまでも目標達成のための手段であり一つの素材であるところから、体育教材と

しての身体運動が体育の目標にいかように寄与するかであり、運動教材をどのように分類しどのように編成するかが問題である。

アメリカ・イギリスでは、小学校段階では多様な児童の遊戯や動きに注目しつつ基本的身体運動とか動きの探求ということがいわれており、わが国とは大きな相違があるといわれているが、いずれにしても体力向上のための発達段階に即した質と量が考慮され、各種のスポーツを実施することのみによらず適切な運動処方をもって運動教材が編成されることが今後の体育科の課題となろう。松田氏が体育科教育の今日的課題と称して、学習指導法の改善について「体操については部分的な運動のみならず全身的な運動がとりあげられるようになり、指導上のくふうがみられるようになってきた。しかし、目標が体力を高めることにおかれているためか、さまざまな運動を形を変えて行わせているところが多い。もっと動きを中心に考え動きの具体的な目標を明確にすることが必要である。」と述べ、またスポーツについては、「スポーツの本質を生かすような指導法を開発することが必要である。」と述べ、ダンスについては、「体操と並んで問題の多い領域であり、身体活動としては他の運動と共通性をもつものであるが、動くこと踊ること自体を楽しむことを基盤として思想や感情をリズムカルな動きで表現する（創作する）運動である。頭の中だけで動きや作品をつくるのではない。」と述べているが、小・中・高校にわたって嫌いな人が多いことでの問題も指導法とからみあって研究をすすめるべからぬ体育教材の一つであろう。猪飼氏が述べるように、まず人の基本運動を分析しその上で体育の教材、学習内容を編成し、人の運動の生理・解剖学的またはキネシオロジー的研究成果を組みとり、更には心理的なものも加え科学的基礎の上に立って体育の学習内容を再編成する必要があるのではないか。そしてまた、基礎的運動を発達に応じてどう学習していくか、それらと体力を構成する諸要素との関係、あるいは各種スポーツ技術との関係について明確にする必要があるといわれている。このように体育を研究するにあたっては、具体的な指導のための研究と体育に関する学的研究との両面がなければならないだろう。

松田氏が、「学校における体力づくりは、運動および指導者の側からのみ考え、実施する児童生徒の側から考えなかったのではないか。実際には個性化の原理が十分に考慮されなかったのではないか。」と自ら進んで運動するように指導することが必要であることを述べているが、ウェイト・トレーニングやサーキット・トレーニング、インターバル・トレーニングなどいろいろなトレーニング方法によりいかにも科学的に成されたようであるが、具体的な指導の場面での配慮が足りなかったのではないだろうか。スポーツ教材にしても喜びと楽しみを求めているのではなく、体力向上と技能向上を目指し、また体育の目的である人間形成を目指しての道徳的要素を追求するあまり、公正・責任・協力などの態度養成を期待しすぎたきらいはないであろうか。スポーツによる人間教育という点では極めて寄与するものが大きいことは考えられる。しかしあまりに技能向上にかたよると一部の人の体育となり、体育がらいを生むことになり、あまりに人間形成を求めるとスポーツ

本来のたのしみがうすれてしまうであろう。松田氏が述べるように、新しいスポーツ教育を求めて「スポーツの本質は自発的で自由な活動であり、自己開発的な活動である。スポーツを自らのものとし、自発的に自由に、しかも自己開発的活動として実践するように指導すること」が必要であり、スポーツそのものを楽しむように指導することであろう。そして先に体力向上・技能向上・人間性の育成を求めるのではなく、スポーツに没頭することにより体力や技能が向上し、スポーツマンシップが身についていくということを期待することが望ましいのではないかと考える。

いずれにせよ、今日、体育については運動不足病の問題を含めて更に検討されるべく、社会からの要請の場面に立たされている。

2. ダンスの特性

体育教材が体操・スポーツ・ダンスとなり久しいが、教材についてのいろいろな分析が成され発展のみえる中で、ダンス教材については実施していないところが多かったり、指導の方法や内容がまちまちで、フォークダンスのみ実施しているところ、既成作品を与えているところ、曲に振りつけをしているところ、児童生徒の創作活動をすすめているところなど教師の指導力にかかっている場合が非常に多い。指導要領には学習内容がのせられているが、そのすすめ方については他の教材同様くわしく具体的には述べられていない。ダンス教材は他の教材と異なり、運動のパターンがないために内容もくわしく、方法も明確にされなければ指導経験のないものにとっての指導は困難となる。各講習会で学んでも、それらを系統立てて実施するにはやはり経験がないとむずかしい。従って指導がなされない結果になったり、いきなり創作に入るために動きを見出せず、作品の構成の仕方もわからない児童生徒にとっては難解であり、経験のない、また必要性を感じない児童生徒に無理な表現性のみを要求するあまり嫌われてしまったりする。中学・高校において、ダンス授業ボイコット運動がおこるなどの話を聞くがなげかわしいことである。しかし、系統的な指導のもとに授業がすすめられると学年が低いほど大変に好まれる教材となる。中学・高校でも指導者が熱心なところでは、朝早くから夜遅くまで作品づくりに精を出し、学校だけで時間が足りず家庭にまで集ってやるので職員会議で問題になるともいわれるが、これほどまでに児童生徒が夢中になるには何か現代の子ども達にとって大きな魅力となっている要素があるのではないか。そこでまず、ダンスの特性をとらえ、その教育的価値を見出してみたい。体育科教育の目標の中核を成すものは健康な身体育成と体力を培うことにあることは衆知の通りであるが、それは人間形成を目的としたものであり、必身一元論の考えをもってすすめられるものである。スポーツ教材は身体的教育の場と心理的教育の場があり、マナーや態度もこの教材を通して学びとることが可能であることは認めるにしても、身体的・美的・知的・精神的な面の調和を求めてのプラトンの述べる体操と音楽の調和と均衡を考え、必身の調和的発達のために情操陶冶を多く願っての教材も体育科にと

っては必要ではないかと考える。体育教材はそれぞれ人間の本能的な力をよりよく伸ばすために教育されていることが多いように考えられるが、ダンス教材においては、身体の動きによる表現活動をもって自己主張をするという最も古い時代から存在していた極めて本能的な活動を、どのように美的に創造していくかということに教育的価値があるのではないかと考える。ダンスの特性は、一般的には、

- (1) 身体を素材とする表現活動である。
- (2) リズミカルな全身運動であり、体力的要因を高めることができる。
- (3) 創造的、情緒的活動である。
- (4) 社会性を育てる集団活動である。 とされており、水谷氏もその特性について、
 - (1) 人間が共通にもつ自己表現である。
 - (2) 感情（表現者）と素材（表現の道具）が同一人の活動である。
 - (3) 美的、創造的活動である。
 - (4) リズミカルな楽しい活動である。
- (5) 協同創作活動である。 と述べている。また、松本氏は、その特性について、
 - (1) 舞踊は身体による美の形成である。
 - (2) 舞踊は新しい美的経験による自己形成である。
 - (3) 舞踊は身体的、美的経験によって生活を高揚させるものである。と述べている。

また邦氏は、「舞踊は人間の身体そのものをも含めた運動の芸術であり、静止をも含めた運動の芸術である。そして舞踊は、我々の感情や感覚や思想を人間の運動による空間形成を通して表現する芸術である。しかしそればかりではなく、形式の美しさとか運動の美しさを主にした作品も多い。したがって、思想や感情をも含めての作家の美的価値判断ということもいえる。従って舞踊は、身体運動による空間形成を通して美的価値判断を表わす芸術である。」と述べている。水谷氏は、小・中・高校の教育現場の中で行なわれるダンス教材としてその特性を述べているが、松本氏・邦氏は、更に専門的・芸術的にとらえているところから、体育教材としてのダンスと広く教育における舞踊とのとらえ方の差があるようだ。しかし、本質的には人間の身体を素材とする身体活動であり、リズミカルな美的創造的活動であるという点で一致している。

人間不在の叫ばれる今日、人間が失ってはならない創造力と主体性を目ざし、培わねばならないものを検討し創造力豊かな人間育成の体育教育を考えねばならない。自然破壊といわれるが、単に緑がなくなることだけではなく、自然のリズムが失われていくことに大きな問題がある。樹木を例にとっても、春に緑が生まれ成長し、秋に落葉となり、これが自然に土にかえり樹木の栄養になっていたことが、コンクリートで固められた中での樹木には公害がおおいかわさき、自然からの栄養もとれない。今まで自然の流れとしてとらえられていたリズムがこわされている。人間の世界でも、機械化により人間本来のもつ自然のリズムがこわされ、ストレス症状をおこし精神異常をきたす多くの例があげられている。

無表情・無気力な人間が多くなったともいわれる。加えて食品公害問題、運動不足による病気の増加。こんな中で果して健康を維持増進できるのか。そのような課題をもって体育科が今後果さねばならない責任はなんであるか。

体力づくりが叫ばれて久しいが、最近はその体力づくりもただいろいろな運動を組み立てて成されていたことに問題も出てきている。体力づくりは学校時代だけの問題ではなく、一生を通じて行なわねばならない健康管理であり、そのためには学校体育の中では、体力づくりも含め運動を好きになるような指導法も考えねばならない。子ども達が運動の必要性を認めた上での主体的創造的な体力づくりをすすめることの必要性を感じずる。アメリカやイギリスの最近の体育のすすめ方の中にある、遊びを通しての動きづくりで体力をつけていくことと創造的運動の組み立てと生活化、協同での創造活動による人間関係、集団内で態度を学ぶなど多くの学ぶ点があるのではないか。現場での体力づくりのくふうの中でも意欲的に体力づくりをすすめるための方法として、動きの多様化、ゲーム化、生活化をはかる過程で自主性や創造性を養うことや、全教育活動の中で自分で自分の体をつくるくふうをし、余暇の利用により協力し合い自覚して行動させるなどを目標としての指導の研究がすすめられている。また活動欲求を満たすためには想像を生かしての運動のくふう、物語の形での学習活動のくふう、自由な創造的運動を通して集団活動の中でひっこみがちな子に自信を与えることができ、何でもできる子を目ざして実施し効果をあげているなどの研究報告もあり、更に人間形成を目ざしての体力づくりとして、自分のつくった運動には特に興味を感じ意欲的に喜んで運動にとり組む態度がみられ、ひとり遊びがなくなり、友だちがすぐできるようになり、違った遊びも覚えよりたのしく遊ぶようになったという報告などもあり、自発的な自由で創造的運動がまさしく体育として価値あるものであることが広く研究されつつある。

自然で自由で創造的な運動の中には、その人個人のよいリズムが現われ、それを通して情緒的満足感を覚え、運動への欲求満足が得られる。バランス・タイミング・リズムなど調整力といわれるものは神経と筋の作用であるが、調整力を身につけるためには種々の動きのパターンを知ることであり、10才位までに90%の発達をみるといわれているので、運動のパターンをこの時期に数多く大脳に記憶させるためにも、バランス・タイミング・リズムを考慮した心地よいリズムカルな多くの動きの経験が必要であり、その動きは個人によって違う心地よいリズムを生み出すところの創造的動きづくりであることが望ましい。これまでの体育科の中の運動の指導には固苦しいところがあり、自然な動きのリズムが出るような自由性がなかった。よいリズムは自由な活動の中から生まれるものであり、調整力といわれるバランス・タイミング・コントロール・リズムのようなものは、自然な自由な活動の中で育てられるもののよう考える。スポーツ活動をのびのび行なうことも自由で創造的な運動（遊びを含む）を行なうことも運動の自由を求めて必要である。

青少年や幼児の運動不足が叫ばれる昨今、体育科の中ではどうしても体力づくりに焦点

がすすんでしまうが、身体教育と合わせて現代人に欠ける精神的な面での欠如にも目を向け、心身ともに健康な人格形成を目指す体育が考えられることが必要である。そのような観点から、ダンス教材の価値を考えなおし、自己の生命を考え治すことのできる体育科へと発展すべくすすめたい。小林氏が生命的なリズムの学習価値ということで舞踊教育の意義について、「舞踊は音楽のリズムと生命的リズムの融合によって成立している。生命のリズムとは舞踊の動き、表現、作品鑑賞などの場において感受することのできる生命の呼吸・躍動・流れなどを表現しているリズムを意味する。この生命的リズムの体験学習を重ねることによって生命感が醸成されるし、また感情も高められる。動的な生命リズムからは暖かく柔らかな情感や情熱的なはげしい情感を持つ生命感が求められるし、また静的な生命リズムからは理性的な冷い情感や厳しく鋭い情感を持つ生命感が求められる。すなわち、暖冷両面的な性格を持った生命感が醸成される。学習価値としては、自己の生命をみつめることのできる効用性と豊かな感受性が身につく効用性とを認めることができるのである。」と述べているが、このことはプラトンの述べるが如く、体操が度を越すと頑固になるが、また音楽も度を越すと軟弱になると称し、体操と音楽の調和、均衡を説いているといわれるが、（この時代の体操は広範囲の運動をとり入れている。）小林氏の述べるように暖冷両面的な性格を体育科の教材にもとり入れるべきではないか。舞踊を深めながら陸上競技に専念している選手がその両立に悩んでいるように、スポーツと舞踊はエネルギーの面でも情緒面でも相反するものがあるために、両立することが困難となる。舞踊を表面的にとらえ、リラックスやリズムカルな動きを学ぶために行うならばスポーツを伸ばすために効果もあろうが、深く追求すれば心情的に求めるものが違うので競争的なことがむずかしくなり、スピーディさに欠ける。プラトンの軟弱になるという言葉に当たるものが、その両立を妨げるものであろう。しかし、人間形成を目ざす体育においては、スポーツ選手として一つの種目を追求する場合とは異なるところから、暖冷両面のよい面を指導することが重要である。

3. ダンス指導の問題と留意点

リズムのある体育指導が盛んにいわれるようになって来た今日、このダンス教材のねらうところは何かを考えねばならない。ダンスの特性については衆知の通りであっても、実施されていないのが現状である。動きのリズムづくりの必要性がいわれ、調整力は10才位までといわれていても、実際にそのための指導は具体化されていない。大学に来てはじめてダンスを知った、あるいは高校ではじめてダンスを指導されたという人が多く、それすら経験せず卒業している人がいかに多いかも衆知の通りである。

自己の能力の限界まで身体を利用し、自分の身体をコントロールしながら表現的運動のリズムを感得することの喜びを経験させたい。自己のもっている思考的なリズムを美的に創造し運動のリズムとして表現していくことは、自分以外にできない全く個人のものであ

り、スポーツなどのある技能を獲得するために努力をすることへの興味と違った欲求を満足させるものがそこにある。舞踊を生活の哲学および計画に寄与する経験として教えることであるとM・N・ドゥブラーが述べるように、ダンス活動は生活の中に根ざした運動開発であり、人間開発の活動である。このようなパターンのない芸術的活動を指導することはむずかしい。他の表現活動は、文章表現（作文、和歌、詩など）、絵による表現、彫刻による表現、音楽による表現など非常に自由に表現し創作される。初歩の段階では指導の手順が全くないわけではない。文章には書き方があり、詩のつくり方もあり、絵をかくための種々の指導もある。よい作品があれば見せてもいる。国語を通して文の表わし方を学んでいるし、よい作品は分析してもみる。音楽などでは名曲を聞かせ、唱歌をうたわせ、そして作曲もする。ダンスは作ることばかりに考えがいつてしまい、そのための指導手順がおろそかにされてはいはしないか。よい踊りがあれば、既成作品を踊らせてもよいのではないか。またよい作品は多く見せる必要もある。生徒同志の作品を見せ合うことより、よいと思われる作品を見せた方が次の作品にとっても大きな影響を与えることは多く経験している。踊ることのたのしさと作ることのすばらしさを同時に与えるべく考慮されることが必要である。宇宙のすべてがリズムであるといわれるように、人間の身体的活動は生命的な躍動—律動—と結びついているといわれる。我々の生活の基盤を支えているのはリズムである。このリズムを学ぶ教材は全ゆる教科の中に含まれているが、動きと共に学び自己の表現活動として学ぶのはダンス教材しかない。またリズムカルな身体活動をもって芸術的な経験を成すのもダンス教材しかない。リズムはあらゆる活動に力と休息をもたらし、快よく流れをつくるといわれるが、いろいろな運動におけるリラックスにもつながるものである。体育科の指導の特徴として今までは運動文化の伝授をして来たきらいがある。自発性を導び自主的創造的活動の場面がなかった。従ってグループでの創作活動の話し合いの場面を見ると活動場面がないので、体力づくりに役立たないから体育ではないということがよく問題にされる。感情や思想を動きにおきかえる時に、よいアドバイスがあると話し合いの時間が短くてすむ。また、長めのフレーズや小作品を多く経験することにより、考えを動きにおきかえることに馴れてくるので話し合いの時間を短くすることができる。動きがゆるやかであったり、静止をしていたりすると運動量が足りないなどいわれるが、表現的動きは呼吸と非常に関連があり、静止の状態の時には呼吸をやや止めた状態にあるので、次の運動に移る時には酸素負債に耐えながらの運動に入ることが多く、運動のリズムに合わせて呼吸を行うために非常に循環持久性を高めるものであり、更に自分の要求する運動の開発のために個人の能力の限界とたたかううちに培われる体力など、個人にあった体力づくりもできるのである。自主的で創造的な教科とされ、指導要領にも作品をつくるための内容が示されているので、表現というとすぐ創作させると考えがちであり、よく指導者から問題提起されるのは、経験のない子どもばかりでとても作品づくりができないのでダンスはできないと子どもの能力不足を理由にしたものが多いが、大学生からはじめてや

っても作品づくりもできるようになり、自由に喜んで行うようになるので指導の方法による差異と考える。ダンス教材では果して作品づくりに至るまでに、どれだけそのための指導を受けているのか疑問である。小学校段階でやってきていない中学生を扱う場合、また中学生段階でやってきていない高校生を扱う場合、高校生段階でやってきていない大学生を扱う場合、いずれも小学校の初歩段階と同じ観点からすすめるべきである。動きの発見、新しい運動をつくる。それをリズムカルに組み立てる。美しく構成する。個の動きを群に構成してみるなど、はじめはスポーツの中から運動をとり出しリズムカルに組みたてたり、日常動作の中の運動をリズムカルに組みかえたり、またそれをいろいろな隊形を使ってどの位反復させるかを考えながら空間移動を経験させ、除々に感じのある動きの発展へとすすめていくとよい。自由に動くことに馴れてきたら表現的な活動へと進めていくことができる。運動を舞踊に変えるのは、経験の豊かさと選択を行なうパーソナリティの感受性であるといわれるように、高校生や大学生では指導の手順がよければ短期間で高校生らしいあるいは大学生らしい感覚の作品をつくるようになる。このことは、ダンスは単なる運動の経験の反映ではなく、その人個人の生活の反映であるところから、知性、情緒、精神、想像力などと運動の調和的な構成として表現されるものと考えられる。従ってこの創造的衝動の力を生活の中にどのように生かしていくかについてもよく考慮されねばならないことである。誰でもが自己の能力の範囲内で自由に創造のたのしみを味わうことができる身体活動である。

体育科の他教材についての現時点の指導課程を考えると、体操教材が体力づくりを求めて今までの形式的な体操から脱皮して新しい動きを生み出すことに積極的になってきた。新体操分野の発展や競技の床運動の中に表われるバレエ的な動き、そして最近のようにモダンのテクニックといわれるものが入るなどだんだんダンスに近づいて来たといわれる。それはリズムに大きな変化がでてきたのであり、床運動が表現的になったのではない。つまり単調なリズムではなく複雑なリズムを要求してきたことであり、複雑なリズムが動きの変化となって表われ、それを称して表現的な動きがみえるようになりダンスに近づいたという見方となっているようである。体操教材の中でも単調なリズムで1・2・1・2と歩いていた運動にいろいろな早さや感じの違う歩き方を動物の歩き方や模倣により、リズムの変化と動きの変化を求めることがある。また、いろいろな現象から、花火、水の流れ、雲、風、台風、海などをとらえて動きやリズムの変化を体得し、いつもと異った部分を不規則に使うことを体得したりする。そのことにより、体操競技に使われる動きを広め複雑なリズムをとらえると共に、もっとも多く使う筋や動きにスジ金を入れる役目をするのではないかと考える。そのこととダンスで花火をやり水の流れをやることは意味が違ってくるのである。ダンスでは、花火や水や雲をとらえる時にそれらの表面的な動きをとらえるだけではなく、そのものの心をくみとろうとするのである。花火に心があるわけではないので花火の心をどのようにとらえるかは結局作者の心を準えることになり、その人の心が

作品の中に表われてくるのであり、そこに個性が発揮されるわけである。従って、体操教材で動物の模倣をする時には、もっともその動物の特徴と思われるリズムをとり出し、それを組み立てて全員同時に体験してもよいが、ダンス教材では個々人がいろいろなリズムパターンを生み出し、自分で考えて創り出すということと人と違った面から物をとらえ、そして他人から物の見方を学ぶことによさがある。そして見ても動いてもよいリズムパターンは人から学んでいく必要がある。

スポーツ教材もリズムをとらえることや動きづくりの必要性などいわれるようになって来た。また体力づくりに対する興味の減少から運動の生活化をねらって自主的・創造的な運動づくりもすすめられてきているので、単にリズムや表現のみを強調するダンスでもいけないし、創造性のみを要求するダンスでもいけない事態になるだろう。しかし、現状ではまだダンスを実施していないところが多いし、他の教材での動きづくりや創造性を求めている指導も徹底していないので、ダンス教材では運動の開発、自主性、創造性、動きのリズムづくり、表現など含めた指導をすすめるべきであろう。やがて、幼・小・中・高校を通しての系統的な指導が実施される状態に進んだ時には、高校段階ではかなり高い芸術性を求めている教材に発展していったよいと考える。また他教材で動きづくりがすすめられるようになった折にはダンスは表現を求めてすすんでよいようになるかもしれない。現時点では、それぞれの段階でダンスでは、はじめから独創的な活動をさせるべくすすめる、自主的・創造的探究の精神をもたせることが必要である。また、教師にとっても子どもにとっても能力以上の動きや課題を与えるとどうしても授業中は話合いが多くなり、活動の場が少なくなるので動くことがダンスの基本であり、その中から自分に必要な運動が生み出されていくことを知らせ言葉によるよりも動くことによってすすめる方が効果的であることを知らせる。そのためには小グループ作業よりはじめ、個人の負担を軽くすると同時に話を早くまとめる経験をさせる。活発な動きとそうでない動きの組み合わせ、急激なリズムの変化、スローモーション、静止の運動、奇妙な動き、隊形の変化、個と群、群と群のか合いなどいろいろなことをウォーミングアップの中で経験させておくことも作品を早く作りあげるために役立つものである。ダンス教材は、教師も子どもも共に無から有を求めて研究しながらすすめていく教材であると考ええる。

Ⅲ ま と め

今日、社会の要請も含めて問題の多い体育においては、体育教材について検討されねばならない時点に至っており、中でもダンス教材については、体操・スポーツ・ダンスと体育教材の中にありながら全く実施していないところが非常に多いことについては、深く検討されねばならない。そしてまた、永年体育教材の中にありながらいつも否定的な意見を多く耳にし今日に至っている。体操やスポーツに対する指導法や内容については、一応パターンもあり指導法に幾分の差はあっても、おおよその線は守られ実施されていると思わ

れるが、ダンス教材については指導者の考え方には大きな開きが見られ、更に否定的な意見が体育者の中からさえ出される。むしろ体育者以外の教師がその必要性を説くことが多いほどである。ダンスは体育指導者にも必要性を感じずる者が少なく、子どももあまり好まないといわれることが多い。しかしそのことだけで体育教材として不必要であるといっ
てよいか否かについては、深く検討されねばならない。体育科の目指すところは人間形成であり、身体活動をもって教育の目標を全とうすべきものである。健康・安全で幸福な生活のために必要な習慣を養い、心身の調和的発達を図るという教育目標は、体育以外では達成しえないものである。国民の体力不足を問題にするところから、体育の目標の一つである体力向上を中心に体育を考えることが多くなり、運動処方として運動の型にとらわれているきらいがあり、運動は目標達成の手段であることを忘れがちとなっている。人間の運動の生理・解剖学的またはキネシオロジー的研究あるいは運動の心理的特質などの科学的基礎に立って体育の学習内容を考慮せねばならない。また最近の子どもの無気力無感動についても、体育を通しやる気のある創造力豊かな人間育成を目指しての主体的・創造的体育をもおしすすめていかねばならない。主体的・創造的な体育をおしすすめるには、運動がもっと自由でなければならない。自由のない運動に創造は生まれない。今までの体育には、運動の自由さが少なかったのではないか。そんな中でダンス教材は自由で个性的で思う存分自分のリズムを発揮するために情緒的に満足のいく活動となるものである。協同での作品づくりでは、お互いの能力を認め合いながら個性を発揮するところから協同の創造活動の中から、よい人間関係を学び、集団内での態度をも学ぶことができる。また美的な活動であり、芸術的要素があり、身体を通しての情操教育として役立つものである。プラトンの体育と音楽の組み合わせの必要性の言をかり、また小林氏の自己の生命をみつめることができそして豊かな感受性が身につくという効用性を考えるとき、ダンス教材の人間として必要な点を強調したい。スポーツとダンスでは、エネルギーの面でも情緒面でも相反するものがあり、プラトンは頑固と軟弱と述べ、小林氏は暖冷と述べているが、この両極を調和よくとり入れた体育指導こそ人間教育としての体育に必要なことではないかと考える。M・N・ドブラーが、ダンス活動は生活の中に根ざした運動開発であり人間開発であると述べているように、今日の体育においては特に必要な教材の一つであると考え
る。体力向上の面からみても活動自体が非常に持久性の高い活動であり、特に循環持久性を高める活動であることは種々の実験で明らかであるが、リズムカルな美的な運動を自分の意志のままに継続していく過程で心身共に満足感を味わうものである。自主的・創造的な運動づくりであり、生活の中に根ざした運動であるところから、これからの体育活動としては意義あるもので、しかも社会体育としてもすすめていく上に効果的なものと考え
る。ダンスセラピーも盛んにいわれるようになった今日、精神障害にも効果的なものであり、全ての人間にとって原始時代から求められて来たダンス活動を今日教育的に求め発展させていく必要があると考える。しかし、その指導過程にむずかしさがあり、パターンのない

芸術活動をいかに教育的に扱うかが問題である。ダンス教材については、作品をつくることに大きな目的があるために、パターンもなく難解なものであり、児童・生徒にも難かしいという印象を与え、経験の少ない指導者にとっては全く頭の痛い教材となってしまう。よき指導者に指導された児童・生徒があまりによく動き、積極的に自由に作品をつくる様子をみるとますます指導する自信がなくなってしまう。思い切って指導にとり組んで生徒の方であまり好んでついてこないとどうしても指導に熱が入らなくなり、進め方に迷いを生じ消極的になってしまう。あるいは指導過程でとまどった時にもなかなか相談する相手もない、またあまりに程度が違いすぎて聞きにくいなどもよく問題にされるところである。共通の指導過程がないので問題提起されても「なかなか恥かしがって動きません」「センスがないのかよい動きが出てきません」などやや見当はずれな意見が出ることが多い。どのような指導手順の結果恥かしがるのか、何をもってセンスがないのかということについて考えてみる必要がありそうだ。ダンス教材がより一般化されるまでは、誰でもが指導にすぐとり組めるようなある程度のパターンづくりがしばらくの間必要ではないか。今後は、個々人より、より開発された自由な動きが引き出されるような指導手順をこまかく示したカリキュラムを作成し、小・中・高校において実験的にを行いその効果を見て更に検討をすすめたい。

参 考 文 献

- 松本千代栄著 : 舞踊美の探求, 大修館書店, 1959 年
 松沢平一著 : 体育と人間形成, 逍遙書院, 1964 年
 佐々木久吉著 : 体育科教育の諸問題, 逍遙書院, 1965 年
 邦 正美著 : 動きのリズム, 万有出版社, 1966 年
 猪飼道夫 } 共著 : 体育の科学的基礎, 東洋館出版社, 1967 年
 江橋慎四郎 }
 佐々木久吉 } 共著 : 統体育科教育の諸問題, 逍遙書院, 1967 年
 美濃部 栄 }
 水谷 光 } 共著 : 身体の動きによる表現, 光文書院, 1969 年
 三浦弓枝 }
 小学校体育新指導シリーズ⑤: ダンスの効率的指導, 1970 年
 日本体育学会第22回大会号, 1970 年
 阿部 忍著 : 体育哲学, 逍遙書院, 1972 年
 邦 正美著 : 舞踊の美学, 富山房, 1973 年
 小野忠文 } 共著 : 体育教育の原理, 東京大学出版会, 1973 年
 猪飼道夫 }

江橋慎四郎 }

村浦とく著 : 舞踊創作とイメージ構成, 明治図書, 1973年

日本体育学会第25回大会号, 1974年

R・L・マレイ著

松本千代栄 } : ダンス学習法, 大修館書店, 1974年

佐藤康子 } 訳

A・ロックハート }

E・ピース } 著

松本千代栄 }

石黒節子 } 訳 : ダンスの創作過程, 大修館書店, 1974年

M・N・ドウブラー著

松本千代栄訳 : 舞踊学原論: 大修館書店, 1974年

体育科教育7月号, 1975年

健康と体力11月号臨時増刊, 文部省体育局監修, 1975年

健康と体力12月号, 文部省体育局監修

水谷 光著 : ダンス指導ハンドブック, 大修館書店, 1975年